

キャットウーマン

2005(平成17)年1月10日鑑賞(ホクテンザ2)



監督＝ピトフ／出演＝ハル・ベリー／シャロン・ストーン／ベンジャミン・ブラット／ランバート・ウィルソン／パイロン・マン／フランシス・コンロイ (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2004年アメリカ映画／104分)

……ブラックレザーのキャットスーツに身を包んだ、ナイスバディのハル・ベリーがこの映画の何よりの売りモノ！ 特別、面白いストーリーがあるわけでもなく、「肉体美」とキャットのアクションの妙を楽しめばいいだけの映画だろうと思っていたら、案の定……。コミックものはもういいや……？

この映画鑑賞の動機は？

もともとマンガ(コミック)をほとんど読まない私は、『バットマン』という人気コミックがあることは知っていても、その映画にはあまり興味がなかったし、その『バットマン』にキャットウーマンという人物(?)が登場していると聞いても、あまり興味がなかった。私がこの映画に興味をもったのは、何よりも『チョコレート』(01年)の涙を誘う演技でアカデミー賞主演女優賞を獲得し、その後『007/ダイ・アナザー・デイ』(02年)でえらくダイナミックなアクションを見せたハル・ベリーが、今度は肌もあらわなブラックレザーの衣装に身を包んで登場するためだ。予告編やポスターで観るその姿は、非常に魅力的かつ刺激的。しかし最初からこんな姿で登場してしまえば、後の楽しみがなくなるのでは……？

キャットウーマンとは？

パンフレットの中には、鷲巢義明氏の「時代によって変化してきた、実写版キャットウーマンのそれぞれの魅力とは……」という解説がある。そこではキャットウーマンの歴史を綴るとともに、「今回の『キャットウーマン』は、現在の女

性のためのキャットウーマンである」と解説している。他方、柴田めぐみ氏の「共感と憧れを抱かせる新ヒロイン“キャットウーマン”！」の解説では、ペイシェンス（Patience＝忍耐・根気）という主人公の名前が、日本でいえばいわば「忍」さんという名前であることが強調されたうえで、「まだまだ男性優位の社会で言いたいことも言えず、昇給や昇進とは無縁ながら誰よりも真面目に働く名もなき女性たち」の代表だという分析がされている。

前者は男性の立場からキャットウーマンを分析しているのに対し、後者は女性の立場から等身大に、いわば自分をこのペイシェンスに投影しながらキャットウーマンを観ているものであり、両者を対比すれば実に面白い。

ミュージカル『キャッツ』の人気と対比してみると？

2005年1月9日、大阪・西梅田のハービスエント7階に劇団四季専用の大阪四季劇場が誕生し、そのこけら落としとして『マンマ・ミーヤ！』が上演された。私はこれを来る2月19日に観に行くことにしているが、このこけら落とし公演に先立って劇団四季の浅利慶太芸術総監督が「劇団四季にとって大阪はふるさと」という趣旨のあいさつしたことからもわかるとおり、大阪は劇団四季にとって非常に大切なまちだ。考えてみれば、東京・新宿に『キャッツ』上演専用のテント型劇場「キャッツ劇場」が作られ、『キャッツ』の上演が始まったのが1983年。以来、『キャッツ』は21年間上演され続けているわけだ。私はこの『キャッツ』を、かつて大阪駅前にあったテント型劇場で1回、1988年のヨーロッパ旅行の際オランダで1回、その後また大阪のMBS劇場で1回観たが、何回観ても飽きることがなく、とにかく楽しいミュージカル。それは、いろいろなネコの物語がストーリー性豊かに展開されることと、歌はもちろんだがネコの衣装を身につけた役者たちの個性豊かな演技によるところが大。

しかしそれに比べると、この『キャットウーマン』は所詮主人公1人だけの登場。また、いったん死んだ人間であるペイシェンスに対して、聖猫エジプシャン・マウ種の「ミッドナイト」の魂が宿ることによって生まれ変わったペイシェンスが「ネコの人間」として誕生し、意識・嗜好・爪・特殊能力・習性等のネコ的特徴・能力をもつことになるのだが、やはり姿形をはじめとしてその根本は人

間。したがって、ミュージカル『キャッツ』の登場人物(?)がすべてネコであることに比べれば、そこに大きな違いがある。さらにその動き(踊り)についてもその迫力や美しさには当然大きな違いがあり、ネコそのものの踊りの方が断然面白いのは当然。したがって、「ネコの人間」よりは「ネコそのもの」の方が面白い……。オレが何を言っているのかわかるかな……?

悪役の化粧品会社はひょっとして……?

内気な広告デザイナーであるペイシェンスが勤めているのは、巨大化粧品会社のヘデア社で、その社長がジョージ・ヘデア(ランバート・ウィルソン)。美しいモデルを広告媒体として使い、女性たちの夢を誘うことによって急成長を続けている会社だ。しかし、ヘデア社が近々発売する「ビューリン」なる新製品は、「若返りクリーム」としての効用をうたっているものの、実はヤバイ成分が……? しかしヘデア社の社長はそんなデータを握っているがこれを隠し、ひたすら儲けんがためにその発売を強行しようとしている! よく似たような話は今の日本でもあちこちでよく聞くような気がするが、どうもそれが生臭い現実のようだ。そんな悪徳企業の秘密を偶然知ったペイシェンスは……?

シャロン・ストーンの居直りは立派!

ジョージの妻で、元ヘデア社のモデルを長い間勤めていたローレル・ヘデアを演じるのがシャロン・ストーン。彼女の絶頂期は、1992年の『氷の微笑』、1993年の『硝子の塔』あたりか……? 特に『氷の微笑』で見た彼女のセクシーさと女の恐さは絶品だった……? そんな彼女も今や40ウン歳。ハリウッドでは主役は張れなくなってきたらしく、最近では出演作も減ったうえ、この映画でも助演、というより脇役に近いもの。パンフレットの中でシャロン・ストーンは、「ハリウッドは私を主演にさせたくないし、助演の方がむしろ楽でいいわよ」と述べているが、果たしてこれは本心だろうか? 『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』(03年)で、デミ・ムーアが敵役として登場していたのと同じようなめぐり合わせだが、かつての栄光を経験した大女優としては、そう簡単に割り切れないのでは……?

2005(平成17)年1月11日記